

《2003年1月例会報告》

【日時・会場】2003年1月23日(木) 19:00～21:20筑波大学附属高校体育館ミーティングルーム→～0:30
カリンカ

【テーマ】高校体育におけるサッカーの取り上げ方—体育実技と体育理論の実践報告

【話題提供者】中塚義実

【報告作成者】中塚義実

【参加者(会員)】麻生征宏(学研) 加納樹里(中央大学) 鈴木崇正(NECメディアプロダクツ)
内藤隆(横河武蔵野フットボールクラブ) 仲澤眞(筑波大学) 中塚義実(筑波大学附属高校) 中
村敬(サッカークラブコーチ) 中村淳(筑波大学大学院・体育経営学研究室) 橋本潤子(フリー
ライター) 三堀潔貴(北野高校) 宮崎雄司(サッカーマニア編集長)

【参加者(未会員)】梅澤佳子(湘南国際女子短大) 江川純子(日本サッカー協会) 蔵森紀昭(成
城学園高校教諭) 高嶋斎加(筑波大学体育専門学群3年次・レジャー論研究室) 堀内梓(筑波大学
修士課程レジャー論研究室) 本名啓恭(日大文理学部/東京都大学サッカー連盟)

注)参加者は、所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

高校体育におけるサッカーの取り上げ方

—体育実技と体育理論の実践報告—

中塚義実(筑波大学附属高校)

<目次>

- I. はじめに—学校体育におけるサッカーの位置づけ
 1. 学習指導要領より
 2. 筑波大学附属高校年間計画より
- II. 体育実技の実践報告
 1. 高校1年生男女別必修単元
 2. 高校3年生男女共修選択単元
 3. 行事単元
- III. 体育理論の実践報告—FIFAワールドカップを題材とした授業の試み
 1. 体育理論の年間計画
 2. FIFAワールドカップを題材とした授業の試み—総合的な学習を視野に入れて
- IV. ディスカッション

I. はじめに—学校体育におけるサッカーの位置づけ

1. 学習指導要領より

学校における教育課程の全国基準である学習指導要領は、約 10 年毎に改訂されている。2002 年度に小・中学校が、2003 年度に高校が新教育課程となり、高校では「情報科」や「総合的な学習の時間」が導入されるとともに、各教科の時間数が一律減となっている。

小学校学習指導要領で「サッカー」が明記されたのが 1968 年の改訂で、これが少年サッカーの普及に大きく貢献したと感じている。このことはあまり注目されていないが、小学校では担任制が中心なので、小学校の体育にサッカーが導入されると先生方もサッカーを勉強しなければならない。ちょうど少年団が始まったのと同時期に導入された学校体育におけるサッカーは、その後の少年サッカーの普及に大きく貢献したと言えよう。新指導要領においては、小学校 1・2 年生は「基本の運動」と「ゲーム」という運動領域のみ示され、3・4 年生の「ゲーム」から「サッカー型ゲーム」という記述が見られる。5・6 年生では「ボール運動」という領域の中に「サッカー」が明記されている。

中学・高校では「球技」の中に「サッカー」が明記されているが、中・高の体育においては「選択制」が大幅に取り入れられており、各学校の事情に応じて種目を選択できることとなっている。

2. 筑波大学附属高校年間計画より（添付ファイル参照）

筑波大学附属高校の年間計画（2002 年度版）は別紙にある通り。ダンスが入っていないが、これは、履修学年を 1 年から 2 年に変えるための過渡的な措置によるものである。

サッカーは 1 年次に男女別の必修単元として約 15 時間程度、3 年次には男女共修選択単元（生徒がやりたい種目を選択する）の中で約 12～15 時間程度行っている。また、各学年とも「スポーツ大会」（球技大会の大規模なもの）という行事へ向けてクラス内でサッカー（フットサル）・バレー・バスケのチームを作り（これも選択制になる）、練習する期間がある。

これらが体育実技の中でのサッカーの取扱いである。

II. 体育実技の実践報告

本校のサッカー授業はほとんど中塚が担当しているが、中には別の先生が担当することもある。大卒についての内容の刷り合わせはするが、実際は担当者が自分なりの方法で授業を進めている。

ここで紹介するのは、中塚担当の体育実技サッカーの概要である。

1. 高校 1 年生男女別必修単元（添付ファイル参照）

男女別、約 40 人前後の人数で授業を行う。かつては 20 時間以上確保されていたが、時間数削減の影響で 15 時間程度となっている。その中で、「する」スポーツとしてのサッカーだけでなく、「みる」能力を高めることも重視しており、「語る」題材としてサッカーの歴史や現状、ルールの背景など、授業の中でいろいろ紹介している。1 年次のサッカーでは、サッカーを「する」「見る」「語る」能力を高めることがねらいである。

授業の全体計画は別紙の通り。毎時間ボールリフティングの時間をとり、新記録が出たら報告することになっている。女子の場合、ほとんどが 2～3 回からスタートするが、最後は 10 回以上つけるようになる者が 3 分の 1～半数はいる。授業以外でも面白がって練習している姿をよく見かける。

ゲームは、適当にコーンを置いてゴールに見立てて行う「ストリートサッカー」から、「フットサル」を経て、最終的にはオフサイドルールありの本格的な「サッカー」（女子はハーフコート、男子はオー

ルコート)まで、段階を追って進めていく。副審をチーム全員が一齐に行うことで、オフサイドの理解も深まるようである。

男子の最初の授業は「フットボールの歴史を体験する」である。中世の英国の農村で行われていた「何でもあり」のボールの奪い合いを再現するところから授業が始まる。数百年の歴史の中でルールが形成されていく過程を、体験しながら、後にビデオ教材で確認しながら進めている。

「みる」スポーツの授業では、特にオフサイドがらみの微妙なところを中心に解説する。最高の教材は94年アメリカ大会のブラジル vs オランダ戦、ベベットのゴールシーンである。オフサイドポジションにいたロマーリオがプレーに無関係の意思表示、そのままプレーが続行された場面を、初めて見る高校生女子はほぼ全員が確認できない。2度、3度とリプレーする中で「あ〜そうだったのか〜」ということを理解し、サッカー観戦のポイントの一つを理解する。テレビ観戦の際には画面外を想像しながら見る必要があることや、全体を見るには競技場で観戦する必要があること、そして番組製作側もサッカーという競技をどうやって伝えるかいろいろ工夫しているということ、「サッカーTVアイ」の映像やスカパーの「テクニカル映像」などを用いて解説する。

生徒たちは男子も女子も、相当な興味を持って、面白がってサッカー授業を受けていると感じる。

2. 高校3年生男女共修選択単元

3年次の前期(本校は前後期の2期制である)は、バレーボール、バスケットボール、サッカー、テニスまたはバドミントンの中から2種目選んで、それぞれ12~15時間程度行う選択実技である。男女と一緒に授業を受けるということが1、2年までの必修単元と異なる点である。そして3年次では、「ささえるスポーツ」をテーマに置いている。

最初の授業で男女一緒にサッカーとフットサルを体験した後、2回目の授業では屋外にホワイトボードを持ち出して、「男女と一緒に楽しむにはどうすればよいか」、すなわち「これからの11~14時間の授業をどう進めていくか」の会議を開く。冒頭の「ブレインストーミング」は中塚が進行するが、その先は生徒だけで進めていく。“授業の当事者”であることが求められる。

会議の結果次第で、授業の進め方は異なるが、講義を必ず1回は行うようにしている。テーマは「ささえるスポーツ」。「個人参加型草サッカー」のすばらしい試みが、中心人物が多忙になり休止状態に陥っていること、個人依存型の活動には限界があること、学校や企業に依存しきっていたこれまでの日本のスポーツ構造はすでに限界にきていること、クラブ育成が今後の課題であることを指摘し、欧米のクラブ組織をビデオで紹介し、これらのトップチームが戦う欧州チャンピオンズリーグの試合を観戦するのが流れである。“授業の当事者”であることを強く求められる生徒は、この講義にも大きな興味を示し、感想文からもいろんなことを考えているのがよくわかる。

男女共修にはいろんな意見があるが、「ささえる」ことの意義は感じてくれているようである。

3. 行事単元

毎年9月の授業は後期はじめの「スポーツ大会」へ向けての練習期間となり、約5~8時間、サッカー(女子はフットサル)を選択した生徒はその練習をする。この期間は、自分たちで練習計画を立てて進めていく選択実技である。ただ、時間数が全体的に減少傾向にある中で、この時期の授業をどうするかは今後の課題である。

Ⅲ. 体育理論の実践報告－FIFA ワールドカップを題材とした授業の試み

1. 体育理論の年間計画

本校では、2単位ある「保健」の授業のうち1単位を「体育理論」に読み替え、通年の体育理論の授業を行っている。これは30～40年も昔から本校が先駆的に行っている取り組みで、トレーニングの話や、その背景にあるスポーツ科学全般の話、スポーツを取り巻く書事象について取り上げている。約30時間の講義は、スポーツ教育の場として非常に大きな成果を挙げていると感じている。

学習内容は各担当に任されている。これは本校が研究校であることに由来しているのだろう。

中塚担当のクラスでは、2002年度に「FIFAワールドカップ」を題材として10時間ほどの授業を試みた。

2. FIFAワールドカップを題材とした授業の試み－総合的な学習を視野に入れて

この試みは、2003年度からの新教育課程に盛り込まれている「総合的な学習の時間」を視野に入れたものでもある。教科の枠を超え、ただ単に知識を詰め込むのではなく、持っている知識を利用して考える題材として、FIFAワールドカップは最適であると改めて感じた。生徒は「日韓共催」「メディアとどう向き合うか」「ルールと審判をどう捉えるか」「ナショナルチームをどう捉えるか」といったテーマを通して、日本と韓国の関係、情報の取捨選択、スポーツの倫理、国とは何か、といったことを考えた。最後の研究授業では「ワールドカップは何を残し、どう活かすか」ということを、「2026年にもう一度開催されたら」という命題を設定して議論した。

授業計画と概要は添付資料にあるので参照されたい（『2002年度筑波大学附属高校研究紀要』、2003.3.発行予定）。

Ⅳ. ディスカッション

（発表者の発言は●で示した。その他は、公開してもよい方のみ明記し、それ以外は○で示した。）

◆1. ナショナリズムとグローバリズムについて－生徒の発言より

○ナショナリズムに高校生が非常に興味を持っていることに関心を持った。地理の方で、ジョン・ベイという人物がおり、“グローバル・スポーツ・アリーナ”、すなわち地球全体がスポーツの場だというとらえ方が為されている。ナショナリズムとグローバリズムを生徒がバランスよく捉えてくれればいいと思う。そういうことを伝える教材としてもワールドカップは非常に良い。私自身も地理の時間で、歴史的な部分を重視しながらワールドカップを10時間ほど取り上げた。第1回の開催国ウルグアイは日本のちょうど反対側。ワールドカップが72年の歳月を経てやっと地球の反対側まで来た。それまでは大西洋世界、すなわちアメリカ大陸かヨーロッパでやっていた。大西洋世界からちょうど反対側までやってきて、本当の“ワールド”カップになったということを強調した。ワールドカップは、総合科目としてはすごくいい教材。オリンピックと抱き合わせでやると毎年やれる。

●中塚：体育理論でオリンピックを取り上げていたこともあるが、オリンピックだと大衆のムーブメントまで引き出せない、インパクトとしてもう一つ弱いような気がする。ただ、ワールドカップとオリンピックを交互に取り上げるのは、サイクルとして好都合だし、学校でやるにはいい。

○「ナショナリズムのごっこ遊び」については、精神科医の香山リカさんが、言葉を替えて同じよう

なことを言っていた。それを知っていて言ったのかどうかは知らないが、高校生にはよく気がついたなと思った。

◆ 2. 生徒に興味を持たせるために一知的水準と関係しているのでは？

○授業アンケートで、「全く興味がなかった、面白くなかった」と答えている1～2人の生徒は、なぜ面白くなかったと感じたのか。かなり冷ややかな目でワールドカップを見ていたと思うので、それを聞きたい。これだけムーブメントがあったのだから興味がないはずないし。「つまんない」と思いつつ、何を思っていたのか。気がついたこともきっと一杯あったと思う。

●中塚：その子の場合、6月のワールドカップを10月～12月に取り上げていたことを指して、「過去のことなので今更取り上げて」というコメントがあった。たぶん彼にとってワールドカップは、自分の周りを通り過ぎただけのイベントだったのではないかと思う。クラスで1～2人そういう生徒がいた。

○知的水準の高さを感じた。全く興味を示さない生徒と、かなり興味を持って意識をそっちへ向ける生徒の割合はどんな感じか。

●中塚：意識を向ける生徒が大多数だったと思う。一番最初に「ワールドカップ概論」をやったとき、ほとんどの生徒が面白がって聞いていた。「国と地域の物語」のとき、その前にあったロシア戦のときどうしていたかクラス全員に聞いたら、5人ぐらいが見ていなかった。「塾行ってました」というのが大半。しかしその時に塾に行っていた子も、授業の後半では面白い発言をしていた。ただ塾に行っただけなのだろう。

○ものごとに幅広く関心を持つ層があるのではないか。他の高校の先生が、本当にこういうことができるかというのを感じる。

◆ 3. ディスカッションのための工夫—高校生の発言を引き出すには

○自分の学校の生徒と比較して見ていたが、うちの生徒はディベートの環境に持っていけない。しゃべらない。授業が一方通行になっていくことしか考えていないこともあるのだろう。ワールドカップを題材にしても、興味を持つ生徒はこんなにも出てこない。無関心。「関心を持つ」に○をつけたりするとしゃべらされるから○をつけないでおこう。そういう発想に向かってしまう。「しゃべらせる」に関して、発言に対して責任を感じてしまうのでしゃべらない。今日のこの会で「使えるな」と思ったのは、何年後、将来、どう世の中が変わっているかわからないという設定で、言いたい放題、それに関しては責任もないという発想で引っ張っていけば、多少うちの子どもたちもいけるかもしれない。身近なテーマについて、ホームルームになるかもしれないが、そういうところでうまく使っていけないか。例えば20年後の成城学園がどうなっているか？ 学校のルールはどうなっているだろう？ 今の学校のルールについてどう思う？ ということから始まって、自分が20年後に教師になったとしたらどうあるべきか、そういうテーマでしゃべらせると面白いかなと思った。

●中塚：言いつばなしの議論は、想像力のトレーニングとして非常にいい。しかし一方で、「そのスタイルが嫌だった」という生徒もごく少数いた。「仮定論は話すのが難しく、僕みたいな人間には参加するのが難しかったような気がする。起こったことについて考えるのは好きだが、そうでないことを考えるのは好きではないし…」というコメントがあった。想像力を働かせて好き勝手に物を言うのに慣れていない生徒もいる。確かにこの子はそういうタイプ。どんな方法であっても、すべてに受け入れられる方法はない。

◆ 4. 学校における体育の重要性・可能性

1) 恵まれたスポーツ環境

○うちの学校で来年、通年2単位のフットサルの授業を開講することになった。選択しなくてもいい時間帯なのだが、男女合わせて30名の高校3年生が選択してきた。あえて選択してきた子どものニーズに応えるために、どのような授業にするかいろいろ考えている。今日の報告は、そこでの授業内容のヒントになった。最後は東京協会主催のフットサル大会に参加することを考えている。卒業したら、今自分が持っているフットサルチーム（成城学園の体育館で夜に活動）につなげようかと考えている。

○中塚先生の授業の進め方を見ていると、ここがスポーツ施設に見えてきた。授業の前半でビデオを見て、後半外に出ていける環境は、学校を卒業したら他にはない。今、地域のスポーツ活動に取り組んでいるが、施設を確保するのが難しい。2時間続きのフットサルの授業ができるということもすばらしい。するだけでなく、見たり考えたりするところも是非入れてもらえたらと思う。そういう環境は、今の日本では学校の他にない。

●中塚：そういう意味で学校の体育はすごく大事だと思う。生徒たちはそのことに気づかないまま卒業している、卒業して初めて気づくところがある

2) 体育理論の重要性

○こういう授業ができるのは、筑波大学附属高校だからではないかという話があったが、そもそも多くの高校は「保健」だけで「体育理論」をやっていない。うちの大学でいうと、体育理論なんて全くイメージが浮かばない。学生だけでなく教員も。体育を理論する、分析する、あるいは「みるスポーツ」など全くイメージがわからない人が圧倒的に多い。そういう人にアプローチしていくのが、多くの高校では難しいのではないかと。健康との関係で、保健については納得してもらっても、体育理論をなぜやらなければならないかについて、問題は出てこないか。

●中塚：この学校では昔から理解があるので問題はない。実は体育理論は、学習指導要領では、「体づくり運動」とともに各学年でしなければならないことになっている。けど実際の指導現場では実技に吸収されており、ほとんど為されていない。体育実技のウォーミングアップのときに、その必要性を説明する、それをもって体育理論とするというのが現場での扱われ方。あとは雨が降ったときの「雨降り理論」。

○今回の場合、このような個性的な授業をやることについて、学内で手続のようなものが必要だったのか？

●中塚：これといった手続はない。

○では、実際にこのようなプログラムを実行していく上で障害になったり、既存授業との兼ね合いで問題になるようなことはなかったのか？

●中塚：保健を2単位やってないというのは問題かもしれない。しかしそこは研究校ということで、情報発信しながら展開することはできる。他校の場合は時間の作り方が難しいだろう。

○附属高校では各担当教官の主体性が確立されていて、中塚先生が担当するクラスでのみ行われている実践報告であるとみた。学ぶ生徒は担当教師によって異なる。それでもいいではないかということで筑波大附属高校はそれでやっている。一般の高校では、学年でクラス横一線でないとい批判されることもあるだろう。必修みたいなところでは横並びにせざるを得ないのが現状。

○梅澤（紙上参加）：「体育理論」の意義について

体育の授業内容特に「体育理論」についての先生方のご苦勞を伺い、残念でなりません。「体育理論」という名称ではスポーツの文化的、社会的側面が扱いにくいのではないのでしょうか。「音楽」は音楽を演奏するだけでなく、理論や文化的背景など豊かに教えてもらえるのに、スポーツではそのような授業が軽視されているということ、残念です。最近の美術の授業は知りませんが、私のころ（20数年前）は美術も体育同様、実技中心だったように思います。美術史や芸術と政治、経済、宗教とのドロドロとした絡み、画家たちの苦惱…等、面白く教えてもらえれば観る楽しさも倍増するのでは。決して「こう鑑賞しなさい」という押し付けではないので誤解しないで下さい。でも、逆に授業で扱うと「こうしなさい、こうあるべきだ」と面白くなくなってしまうのかな。

3) 選択制について

○3年生の選択制は昔からやっているのか

●中塚：現行の指導要領から（約10年前）

○うちの学校も同様。ニュースポーツなどをやっている。生徒を見ていると、企画書を作ったり、主体的に学んでいるなどという感じを受ける。新指導要領でも続くのか。

●中塚：選択制がどんどん入っている。1～2年の種目を全員必修としている附属高校のような計画の方が少なくなっているのではないか。新指導要領ではもっと選択の幅が増えてくる。行き着く先は、体育そのものが選択になっていくことだろう。大学がそうだった。だから声を大にして、「体育大事やでえ！」と言いたい。その時に、上手にするために大事だけでなく、スポーツをトータルで楽しむ能力を育てるために体育が必要と言っていきたい。選択制も、うまくいっているところはいいが、ただの放任になっているところも耳に入ってくる。その方が多いのではないか。「休み時間感覚」も大事だが、体育としてのけじめは必要。

○生徒の問題がある。きちんとこなせる生徒はいい。遊ぼうと思っただけでも遊べる。

●中塚：私の担当する卓球の授業では、目標を「温泉で卓球が楽しめるようになろう」にして、ラスト3時間で「温泉卓球大会」を開いている。立候補した生徒が実行委員になって、30人が1時間、卓球台8台を使って遊べるイベントを考える。結構面白い。温泉卓球だから体育館シューズでなくスリッパを履いてやる企画とか、頭にタオルを載せてやる企画とか、いろいろ考えてくる。

○体育が選択制になって、やっと体育教師が目覚めてきたかなと感じている。必修で、当然やって来る者に対して教えるという姿勢から選択制になって来た時に、体育の魅力をもっと伝えなければならないという焦りが出てきたのではないか。選択制にしても、選択調査をしたときに、いいなと思ったものに集まってくるし、集まらなければその講座はつぶれてしまう。自分の専門の魅力をできるだけ宣伝し、生徒を引き込んでいく努力がようやく出てきたような感じがする。将来的にはお金を払っても参加したいというのが社会に出てからのスポーツとの関わりになってくるわけで、そうしてでも参加したいという者を育てていきたいし、スポーツの魅力を伝えていきたい。

◆5. その他

○今からでもこの学校に入り直して体育の授業を受けたいと思った。

○自分にとって体育・スポーツがあるのが当たり前だったが、スポーツの良さをどう伝えるかについて考えた。去年はワールドカップが日本で行われたということで、わけがわからず盛り上がったところがあるが、ワールドカップイヤーでないときにどうするかが課題。

○梅澤：スポーツは、よい意味でも悪い意味でも利用しやすいしされやすい。よい意味で利用していったらいい。スポーツを共通の話題として話すとうわりやすいとよく言われる。若い人も、スポーツを切り口にして話をしていくと入りやすい。スポーツを切り口にしながら、グローバリズムとナショナリズム、経済格差の問題など、スポーツからイメージを広げていくのはいいのではないかと感じた。そういったことにスポーツが、教育現場で利用されないのはすごく残念。むしろスポーツ以外の授業でスポーツが利用されていることの方が多いのではないか。他の科目の先生がワールドカップ（スポーツ）を切り口としてどのように利用されていくのか興味ある。他の科目との連携した授業なども考えられるのではないか。

もう一つは、筑波大学附属高校だからできるという指摘があったが、諦めてしまうのは非常にもったいない。今回、女子の短期大学の授業でワールドカップを題材にして授業をやってみた。受講者は女子。「イギリスってどこにあるの？」（イングランド・ウェールズ…となるとかなり混乱）というような学生たちだが、「日韓共催ワールドカップが身近に及ぼした経済的・社会的影響について」をレポート課題に、気づいたことを何でもいいからレポートしなさいと言うと、なかなか面白いものが出てきた。「何でこんなに盛り上がっているの？」、「ワールドカップのおかげでバイト仲間がシフト入ってくれない」、「バイトに入ったけど全然お弁当を買いに来てくれない」など、生活に密着したところからワールドカップをレポートに書いてくる。『短大で国際理解という授業を受講しているが、友達と試合を観戦にでかけ、一緒にわかファンをしている友達が会場で知合った外国人と一緒に盛り上がって「これこそ国際理解だ！」とか言っているのに違和感を感じ、真の国際理解とは…!?』なんて真面目に考えるレポートや、新聞の連載等を資料化し、海外から訪れたサポーターが今回ワールドカップのためにどのように資金作りをし、滞在方法を工夫したかといったことから外国人サポーターのサッカーへの思いをまとめ呆れたというレポート、試合中の水道使用量状況を調べたり…。レポートのレベルはどうあれ、筑波大附属高校（=知的好奇心が旺盛）だから出来る…ということを考えずに、それなりに考えるきっかけを与えることはできるのではないかと思う。

○JAWOCには学校の先生から、「授業でこんな話をしたいので関連の資料はないか」といった問い合わせが大会前から結構あった。広報に回したのでどんなものが出ていったかは知らないが、JAWOCで働いていても、皆自分の専門のことで精一杯で、全体のことは何も知らなかった。ためになった。

●中塚：引き続きこの学校で、この学校以外でも応用できるような体育実践をしていきたい

以上